

FUJITSU Workstation CELSIUS

CELSIUS C780

製品ガイド

(機種別編)

本書をお読みになる前に

1 各部名称

2 取り扱い

3 周辺機器

4 お手入れ

5 仕様

目次

本書をお読みになる前に	4
安全にお使いいただくために	4
本書の表記	4
Windows の操作	6
BIOS やドライバーのアップデートについて	7
商標および著作権について	7
第1章 各部名称	
1.1 ワークステーション本体前面	9
1.2 ワークステーション本体背面	10
第2章 取り扱い	
2.1 ディスプレイ	13
2.1.1 注意事項	13
2.1.2 解像度を変更する	13
2.1.3 拡大表示設定を変更する	14
2.2 マルチディスプレイ機能	15
2.2.1 マルチディスプレイ機能とは	15
2.2.2 注意事項	16
2.2.3 マルチディスプレイ機能を設定する	17
2.3 省電力	18
2.3.1 省電力状態	18
2.3.2 電源を切る	20
2.3.3 省電力設定	21
2.3.4 UPS を使用する場合	22
2.4 光学ドライブ	23
2.4.1 注意事項	23
2.4.2 使用できるディスク	23
2.4.3 ディスクをセットする	25
2.4.4 ディスクを取り出す	26
2.4.5 ディスクに書き込む	27
2.5 通信	29
2.5.1 有線 LAN	29
2.6 フラッシュメモリディスク	32
2.6.1 フラッシュメモリディスクをフォーマットする	32
2.7 セキュリティチップ（TPM）	33
2.8 ステータスマニター	34
2.8.1 センサーの状態確認	34

第3章 周辺機器

3.1 周辺機器を取り付ける前に	38
3.1.1 注意事項	38
3.2 コネクタの接続／取り外し	39
3.2.1 注意事項	39
3.2.2 ディスプレイコネクタ	39
3.2.3 USBコネクタ	41
3.2.4 LANコネクタ	42

第4章 お手入れ

4.1 日常のお手入れ	44
4.1.1 ワークステーション本体の表面の汚れ	44

第5章 仕様

5.1 本体仕様	46
5.1.1 CELSIUS C780	46
5.1.2 グラフィックスカード	49
5.2 CPU	52
5.3 ディスプレイ	54
5.3.1 解像度	54
5.4 光学ドライブ	55

本書をお読みになる前に

安全にお使いいただくために



本製品を安全に正しくお使いいただくための重要な情報が『取扱説明書』に記載されています。特に、「安全上のご注意」をよくお読みになり、理解されたうえで本製品をお使いください。

本書の表記

本書の内容は2019年7月現在のものです。お問い合わせ先やURLなどが変更されている場合は、「富士通パーソナル製品に関するお問い合わせ窓口」へお問い合わせください。詳しくは、『取扱説明書』をご覧ください。

■ 本文中の記号

本文中に記載されている記号には、次のような意味があります。

記号	意味
	お使いになるときの注意点や、してはいけないことを記述しています。必ずお読みください。
	操作に関連することを記述しています。必要に応じてお読みください。
→	参照ページを示しています。

■ キーの表記と操作方法

本文中のキーの表記は、キーボードに書かれているすべての文字を記述するのではなく、説明に必要な文字を次のように記述しています。

例：【Ctrl】キー、【Enter】キー、【→】キーなど

また、複数のキーを同時に押す場合には、次のように「+」でつないで表記しています。

例：【Ctrl】 + 【F3】キー、【Shift】 + 【↑】キーなど

■ 連続する操作の表記

本文中の操作手順において、連続する操作手順を、「→」でつなげて記述しています。

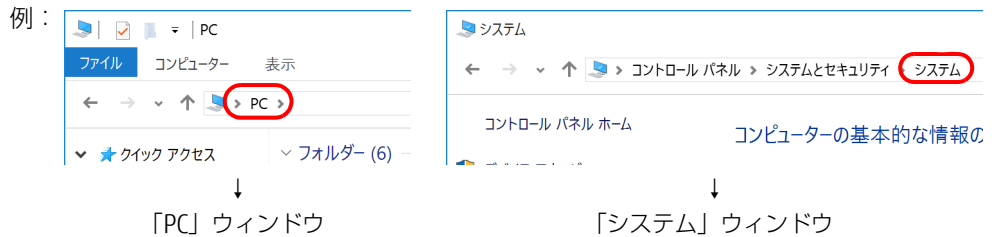
例：コントロールパネルの「システムとセキュリティ」をクリックし、「システム」をクリックし、「デバイスマネージャー」をクリックする操作



「システムとセキュリティ」→「システム」の「デバイスマネージャー」の順にクリックします。

■ ウィンドウ名の表記

本文中のウィンドウ名は、アドレスバーの最後に表示されている名称を表記しています。



■ 画面例およびイラスト

本文中の画面およびイラストは一例です。お使いの機種やモデルによって、実際に表示される画面やイラスト、およびファイル名などが異なることがあります。また、イラストは説明の都合上、本来接続されているケーブル類を省略したり形状を簡略化したりしていることがあります。

■ 本文に記載している仕様とお使いの機種との相違

ご購入時の構成によっては、本文中の説明がお使いの機種の仕様と異なる場合があります。あらかじめご了承ください。

なお、本文内において書き分けがある箇所については、お使いの機種の情報をお読みください。

■ 製品名の表記


本文中では、製品名称を次のように略して表記します。

製品名称	本文中の表記		
Windows 10 Pro for Workstations 64ビット版	Windows 10 Pro for Workstations	Windows 10	Windows
NVIDIA® Quadro RTX™ 5000	Quadro RTX 5000	Quadroシリーズ	
NVIDIA® Quadro RTX™ 4000	Quadro RTX 4000		
NVIDIA® Quadro® P5000	Quadro P5000		
NVIDIA® Quadro® P4000	Quadro P4000		
NVIDIA® Quadro® P2000	Quadro P2000		
NVIDIA® Quadro® P620	Quadro P620		
NVIDIA® Quadro® P400	Quadro P400		
Roxio Creator LJ	Roxio Creator		

Windowsの操作

■ アクションセンター

アプリからの通知を表示する他、クリックすることで画面の明るさ設定や通信機能の状態などを設定できるアイコンが表示されます。

- 1 画面右下の通知領域にある  をクリックします。
画面右側に「アクションセンター」が表示されます。

■ 「コントロールパネル」 ウィンドウ

次の手順で「コントロールパネル」ウィンドウを表示させてください。

- 1 「スタート」ボタン→「Windows システム ツール」→「コントロールパネル」の順にクリックします。

■ Windowsのヒント

本書で説明されていないWindowsの機能については、次の操作で表示されるWindowsのヒントをご覧ください。


Windowsのヒントのご利用は、ネットワークに接続する必要があります。

- 1 「スタート」ボタン→「ヒント」をクリックします。
- 2 画面左側のメニューで「ヒントを参照する」をクリックします。

■ ユーザーアカウント制御

本書で説明しているWindowsの操作の途中で、「ユーザーアカウント制御」ウィンドウが表示される場合があります。これは、重要な操作や管理者の権限が必要な操作の前にWindowsが表示しているものです。表示されるメッセージに従って操作してください。

■ 通知領域のアイコン

デスクトップ画面右下の通知領域にすべてのアイコンが表示されていない場合があります。表示されていないアイコンを一時的に表示するには、通知領域の  をクリックします。

BIOSやドライバーのアップデートについて

本ワークステーションには、さまざまなアプリや周辺機器の接続／制御に必要なBIOS、ドライバーなどが搭載されています。

これらのアプリ、BIOS、ドライバーに対して、アップデートプログラムが提供されることがあります。

アップデートプログラムには、次のような内容が含まれています。

- 機能の向上、追加
- 操作性の向上
- 品質改善

本ワークステーションをより快適にお使いいただくために、常に最新版のBIOSやドライバーを適用してください。

アップデート方法については、弊社アップデートサイト（http://www.fmworld.net/biz/fmv/index_down.html）をご覧ください。

商標および著作権について

Intel、インテル、Intel ロゴ、Intel SpeedStep、Xeonは、アメリカ合衆国および / またはその他の国における Intel Corporation の商標です。

NVIDIA、Quadro、Quadro RTXは、NVIDIA Corporationの登録商標または商標です。

Corel、Corel バルーンロゴ、Roxio、Roxio のロゴ、Roxio Creatorは、カナダ、アメリカ合衆国および / またはその他の国の Corel Corporation および / またはその関連会社の商標または登録商標です。

VirtualLinkは、VirtualLink コンソーシアムの商標です。

その他の各製品名は、各社の商標、または登録商標です。

その他の各製品は、各社の著作物です。

その他のすべての商標は、それぞれの所有者に帰属します。

Copyright FUJITSU LIMITED 2019

1

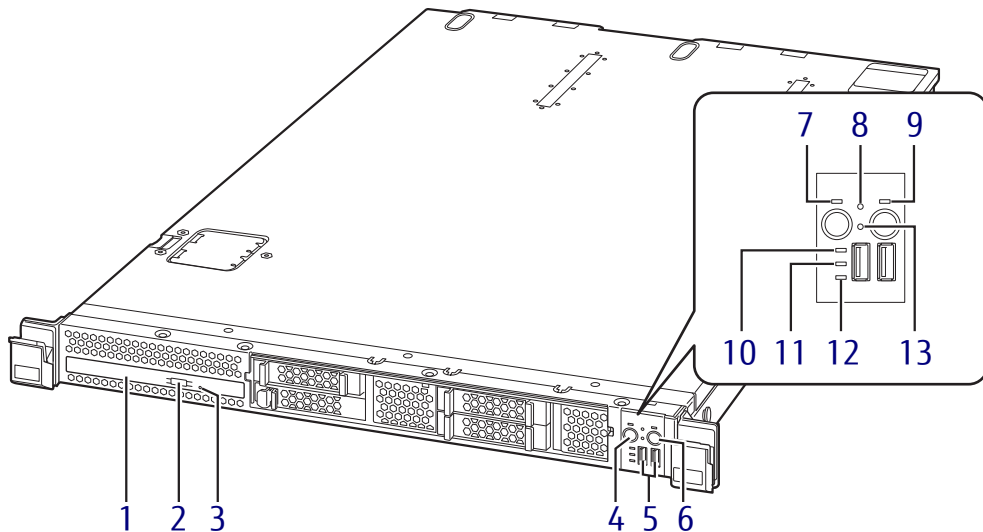
第1章

各部名称

各部の名称と働きについて説明しています。

1.1 ワークステーション本体前面	9
1.2 ワークステーション本体背面	10

1.1 ワークステーション本体前面



1 光学ドライブ

スーパーマルチドライブが搭載されています。(→P.23)

2 ディスク取り出しボタン

3 強制取り出し穴

光学ドライブのトレイが開かなくなったときに使用する穴です。(→P.27)

4 IDボタン

メンテナンスをするときに、IDボタンを押すことで、本ワークステーションを判別するためのIDランプを点灯させます。

5 USB 2.0 Type-Aコネクタ

(→P.41)

6 電源ボタン

ワークステーション本体の電源を入れたり、省電力状態(→P.18)にしたりします。

POINT

- ▶ コンセントに接続後約60秒間は、ワークステーションの初期化処理が行われるため電源ボタンが無効になります。

7 IDランプ

IDボタンが押されると、青色に点灯します。

8 リセットボタン

本ワークステーションでは使用できません。

9 電源ランプ

本ワークステーションの状態を表示します。

ランプ	本ワークステーションの状態
緑色点灯	動作状態
オレンジ色点灯	電源オフ(電源ケーブル接続時) / 休止状態 ^注
消灯	電源ケーブルを接続していない

注：電源を切った後すぐに電源ボタンを押した場合は、数秒待った後に電源が入ります。これにより電流過負荷が回避されます。

10 保守ランプ

本ワークステーションの状態を表示します。

ランプ	本ワークステーションの状態
消灯	正常(警告/異常を未検出)
オレンジ色点灯	警告を検出 ^注
オレンジ色点滅	異常を検出 ^注

注：電源オフ状態および省電力状態(休止状態)の場合も、ランプは点灯または点滅します。
『製品ガイド(共通編)』の「3章 トラブルシューティング」—「保守ランプが点灯または点滅する」をご覧ください。

11 ディスクアクセスランプ

内蔵フラッシュメモリディスクにアクセスしているときに点灯します。

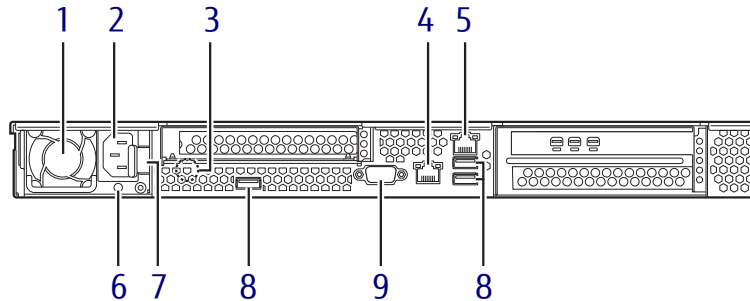
12 CSSランプ

本ワークステーションでは、サポートしていません。

13 NMIボタン

本ワークステーションでは使用できません。

1.2 ワークステーション本体背面



1 排気孔

ワークステーション本体内部の熱を外部に逃がします。

2 インレット

本ワークステーションに添付の電源ケーブルを接続します。

3 IDランプ

IDボタンが押されると、青色に点灯します。

4 LAN コネクタ1

通常での使用、またはワークステーション制御用コネクタです（詳しくは、『iRMC（リモートマネージメントコントローラー）』をご覧ください。）。

IPアドレスは、LAN コネクタ2と異なるサブネットアドレスで使用してください。（→P.29）（→P.42）

5 LAN コネクタ2

通常使用する場合に接続します。（→P.42）

6 電源ケーブル固定用穴

添付のリピータイで、電源ケーブルを固定します。

7 電源ユニット取り外しレバー

8 USB 3.0 Type-Aコネクタ

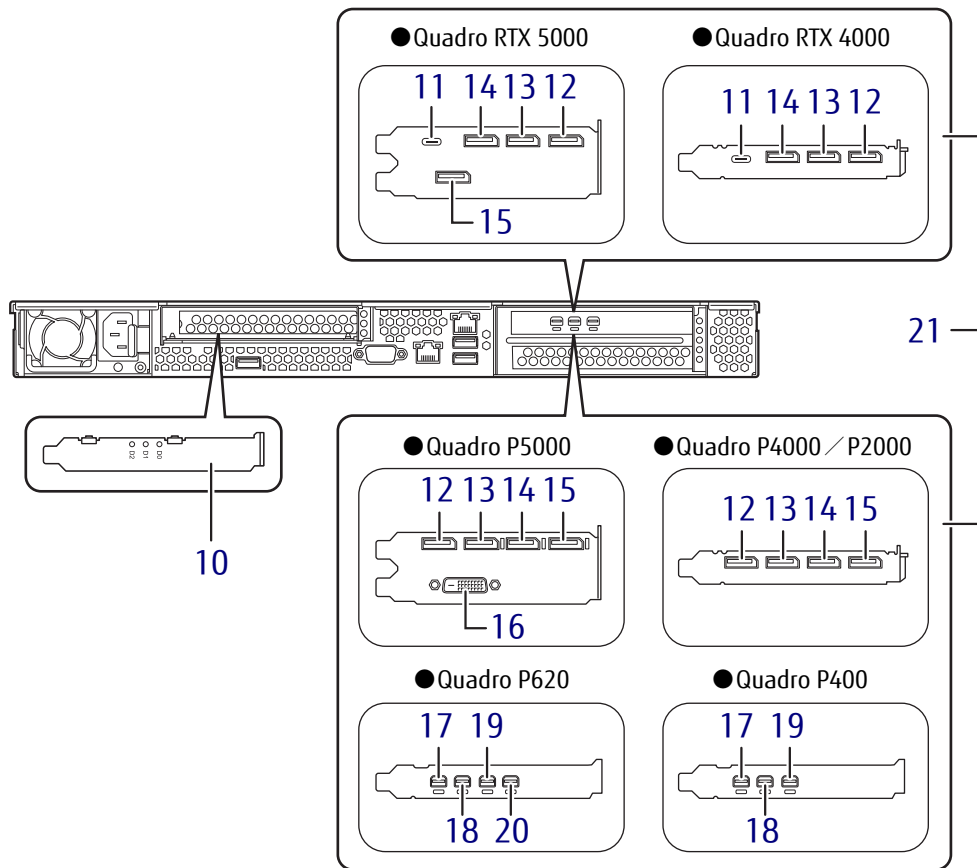
（→P.41）

9 アナログディスプレイコネクタ

本ワークステーションでは、使用できません。

POINT

- ▶ LAN コネクタ1とLAN コネクタ2のコネクタ番号（順番）は、OS上で表示される順番と一致しない場合があります。「2.5.1 有線LAN」（→P.29）の図1をご覧ください。LANコントローラー名を確認して、設定を行ってください。



10 SATA-RAID1 カード
(SATA-RAID1 カード搭載機種)

11 VirtualLink コネクタ
(→P.41)

12 DisplayPort 1 コネクタ
(→P.39)

13 DisplayPort 2 コネクタ
(→P.39)

14 DisplayPort 3 コネクタ
(→P.39)

15 DisplayPort 4 コネクタ
(→P.39)

16 DVI-D コネクタ
(→P.39)

17 Mini DisplayPort 1 コネクタ
(→P.39)

18 Mini DisplayPort 2 コネクタ
(→P.39)

19 Mini DisplayPort 3 コネクタ
(→P.39)

20 Mini DisplayPort 4 コネクタ
(→P.39)

21 グラフィックスカード
ディスプレイを接続します。複数のディスプレイを同時に接続することができます。
(→P.15)

2

第2章

取り扱い

本ワークステーションを使用するうえでの基本操作や、本ワークステーションに取り付けられている（取り付け可能な）周辺機器の基本的な取り扱い方について説明しています。

2.1 ディスプレイ	13
2.2 マルチディスプレイ機能	15
2.3 省電力	18
2.4 光学ドライブ	23
2.5 通信	29
2.6 フラッシュメモリディスク	32
2.7 セキュリティチップ（TPM）	33
2.8 ステータスマニター	34

2.1 ディスプレイ

ここでは、本ワークステーションに接続した1台のディスプレイを使う方法について説明しています。

ディスプレイの取り扱いについては、お使いのディスプレイのマニュアルをご覧ください。ディスプレイを接続する方法については、「3.2.2 ディスプレイコネクタ」（→P.39）をご覧ください。


複数のディスプレイを使ってマルチディスプレイ機能を使う方法については、「2.2 マルチディスプレイ機能」（→P.15）をご覧ください。

2.1.1 注意事項

- お使いのディスプレイと本ワークステーションの両方が対応している解像度のみ表示できます。お使いのディスプレイのマニュアルをご覧ください。表示可能な解像度を確認してください。
- 解像度などを変更するときに一時的に画面が乱れることがありますが、故障ではありません。

2.1.2 解像度を変更する

ここでは、ディスプレイの解像度、リフレッシュレートの変更方法について説明します。

- 1 「スタート」ボタン→  (設定) → 「システム」の順にクリックします。
- 2 画面左側のメニューで「ディスプレイ」をクリックします。
- 3 解像度を変更します。
 1. 画面右側の「解像度」で設定したい解像度を選択します。
 2. 設定を確認するメッセージが表示されたら、「変更の維持」をクリックします。
- 4 リフレッシュレートを変更します。
 1. 画面右側の「ディスプレイの詳細設定」をクリックします。
「ディスプレイの詳細設定」ウィンドウが表示されます。
 2. 「ディスプレイ1のアダプターのプロパティを表示します」をクリックします。
 3. 表示されたウィンドウで「モニター」タブをクリックします。
 4. 「画面のリフレッシュレート」を選択し「OK」をクリックします。

POINT

- ▶ 設定可能な値は、「5.3 ディスプレイ」（→P.54）をご覧ください。

- ▶ 次の手順でも、解像度を変更することができます。
 1. 「スタート」ボタン→「NVIDIA Control Panel」の順にクリックします。
「NVIDIA software license agreement」が表示された場合は「Agree and Continue」をクリックします。
「NVIDIAコントロール パネル」が表示されます。
 2. 画面左側のメニューで「ディスプレイ」→「解像度の変更」をクリックします。
 3. 「解像度」、「リフレッシュ・レート」を設定します。
 4. 「適用」をクリックします。
確認のメッセージが表示された場合は、メッセージに従って操作します。
- ▶ 画面が正常に表示されない場合は、何もせずに15秒程度待ってください。変更前の設定に戻ります。

2.1.3 拡大表示設定を変更する

ご購入時の解像度より小さい解像度に設定した場合、画面を拡大して表示できます。

- 1** 「スタート」ボタン→「NVIDIA Control Panel」の順にクリックします。
「NVIDIA software license agreement」が表示された場合は「Agree and Continue」をクリックします。
「NVIDIAコントロール パネル」が表示されます。
- 2** 画面左側のメニューで「ディスプレイ」→「デスクトップのサイズと位置の調整」をクリックします。
- 3** 拡大表示設定を選択します。
 - ・縦横比
画面の縦横比を維持したまま最大限に拡大されます。
 - ・全画面表示
画面がディスプレイ全体に拡大されます。
 - ・スケーリングなし
画面は拡大されずに中央に表示されます。
- 4** 「適用」をクリックします。
確認のメッセージが表示された場合は、メッセージに従って操作します。

重要

- ▶ 画面が正常に表示されない場合は、何もせずに15秒程度待ってください。変更前の設定に戻ります。

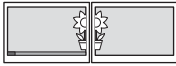
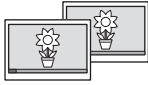
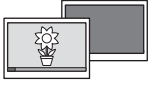
2.2 マルチディスプレイ機能


本ワークステーションに複数のディスプレイを接続すると、マルチディスプレイ機能が使えるようになります。

ディスプレイの取り扱いについては、お使いのディスプレイのマニュアルをご覧ください。外部ディスプレイを接続する方法については、「3.2.2 ディスプレイコネクタ」（→P.39）をご覧ください。

2.2.1 マルチディスプレイ機能とは

マルチディスプレイ機能により、複数のディスプレイを使用した次のような表示方法を選択できます。

表示方法	説明
拡張デスクトップ表示 	複数のディスプレイを1つの画面として表示します。 Windowsのタスクバーはすべてのディスプレイに表示されます。 それぞれのディスプレイの解像度は別々に設定できます。
クローン表示 	複数のディスプレイに同一の画面を表示します。すべてのディスプレイの解像度は同じである必要があります。
シングル表示 	複数のディスプレイのどれか1つに画面を表示します。表示するディスプレイは切り替えることができます。

【】 + 【P】 キーを押すことで、表示方法を選択する画面を表示できます。

2.2.2 注意事項

- お使いのディスプレイと本ワークステーションの両方が対応している解像度のみ表示できます。お使いのディスプレイのマニュアルをご覧ください。表示可能な解像度を確認してください。
- マルチディスプレイ機能を変更するときは、動画を再生するアプリは終了してください。
- マルチディスプレイ機能は、Windowsが起動している場合にのみ有効です。
- 2台以上のディスプレイを接続している場合、POST画面やBIOSセットアップ画面の表示されるディスプレイは次のようになります。

・Quadro RTX 5000を選択した場合

表示されるディスプレイを接続しているコネクタの優先順位は、DisplayPort 1 コネクタからDisplayPort 4 コネクタの順になります。

・Quadro RTX 4000を選択した場合

表示されるディスプレイを接続しているコネクタの優先順位は、DisplayPort 1 コネクタからDisplayPort 3 コネクタの順になります。

・Quadro P5000を選択した場合

表示される優先順位	1	2	3	4	5
表示されるディスプレイを接続しているコネクタ	DisplayPort 1	DisplayPort 2	DisplayPort 3	DisplayPort 4	DVI-D

・Quadro P4000／Quadro P2000を選択した場合

表示されるディスプレイを接続しているコネクタの優先順位は、DisplayPort 1 コネクタからDisplayPort 4 コネクタの順になります。

・Quadro P620を選択した場合


表示されるディスプレイを接続しているコネクタの優先順位は、Mini DisplayPort 1 コネクタからMini DisplayPort 4 コネクタの順になります。

・Quadro P400を選択した場合

表示されるディスプレイを接続しているコネクタの優先順位は、Mini DisplayPort 1 コネクタからMini DisplayPort 3 コネクタの順になります。

- 解像度などを変更するときに一時的に画面が乱れることがありますが、故障ではありません。

2.2.3 マルチディスプレイ機能を設定する

- 1 「スタート」ボタン→（設定）→「システム」の順にクリックします。
- 2 画面左側のメニューで「ディスプレイ」をクリックします。
- 3 画面右側の「複数のディスプレイ」で表示したい画面に設定します。
 - ・ 表示画面を複製する：クローン表示になります。
 - ・ 表示画面を拡張する：拡張デスクトップ表示になります。
 - ・ 1のみに表示する：シングル表示になります。ワークステーション本体のディスプレイのみに表示します。
 - ・ 2のみに表示する：シングル表示になります。外部ディスプレイのみに表示します。
- 4 設定を確認するメッセージが表示されたら、「変更の維持」をクリックします。
- 5 必要に応じて、表示する画面の位置、明るさ、解像度、向きを選択します。

POINT

- ▶ 設定可能な値は、「5.3 ディスプレイ」（→P.54）をご覧ください。
- ▶ リフレッシュレートを変更する場合は、「2.1.2 解像度を変更する」（→P.13）の手順4を行ってください。
- ▶ 次の手順でも、マルチディスプレイ機能を設定することができます。
 1. 「スタート」ボタン→「NVIDIA Control Panel」の順にクリックします。
「NVIDIA software license agreement」が表示された場合は「Agree and Continue」をクリックします。
「NVIDIAコントロールパネル」が表示されます。
 2. 画面左側のメニューで「ディスプレイ」→「複数のディスプレイの設定」をクリックします。
 - ・ 拡張デスクトップにする場合、2台以上のディスプレイにチェックを付け、表示されているディスプレイを右クリックし、「デスクトップをこのディスプレイに拡張する」をクリックします。
必要に応じて、表示されているディスプレイをドラッグして、2つのディスプレイの位置を設定します。「*」と表示されているのがプライマリディスプレイです。
 - ・ クローン表示にする場合、2台以上のディスプレイにチェックを付け、表示されているディスプレイを右クリックし、「ディスプレイを複製する」をクリックします。
 - ・ シングル表示にする場合、表示する1台のディスプレイにのみチェックを付けます。
 3. 「適用」をクリックします。
確認のメッセージが表示された場合は、メッセージに従って操作します。
 4. 必要に応じて画面左側のメニューで「ディスプレイ」→「解像度の変更」をクリックして、「解像度」、「リフレッシュ・レート」を設定し、「適用」をクリックします。
確認のメッセージが表示された場合は、メッセージに従って操作します。
- ▶ 画面が正常に表示されない場合は、何もせずに15秒程度待ってください。変更前の設定に戻ります。

2.3 省電力

ここでは、ワークステーションを使わないときに省電力にする省電力状態と、その他の節電機能について説明しています。


2.3.1 省電力状態

Windowsの動作を一時的に中断させた状態（休止状態）です。
フラッシュメモリディスクにWindowsの状態を保存するため、電源が切れてもWindowsの状態を保存できます。

■ 注意事項

- 状況により省電力状態にならない場合があります。メッセージが表示された場合は、メッセージに従って操作してください。
- 状況により省電力状態になるのに時間がかかる場合があります。
- レジュームした後、すぐに省電力状態にしないでください。必ず10秒以上たってから省電力状態にするようにしてください。
- 省電力状態にした後、すぐにレジュームしないでください。必ず10秒以上たってからレジュームするようにしてください。

■ 省電力状態にする

操作／条件	動作
メニューから選択する	次の操作で選択したメニューの動作になります。 1. 「スタート」ボタン→  (電源) の順にクリックし、メニューを選択します。
電源ボタンを押す ^{注1}	Windowsが終了し、電源が切れます。 「■ 電源プランの設定を変更する」(→P.21)
一定時間操作しない	休止状態になります。 「■ 電源プランの設定を変更する」(→P.21)

注1：電源ボタンは4秒以上押さないでください。電源ボタンを4秒以上押すと、Windowsが正常終了せずに本ワークステーションの電源が切れてしまいます。


■ 省電力状態からレジュームする

操作／条件	動作
電源ボタンを押す	レジュームします。
USBキーボードや USBマウスを操作する	レジュームしません。
Wakeup on LAN (WoL) 機能	レジュームします。 「■ WoL機能によるレジュームの設定を変更する」(→P.19)

■ WoL機能によるレジュームの設定を変更する

WoL 機能とは、他のコンピューターから有線LAN 経由で本ワークステーションを起動・レジュームする機能です。WoL 機能には、電源オフ状態から起動する機能と、省電力状態からレジュームする機能があります。ここでは、省電力状態からレジュームするための設定について説明します。

電源オフ状態から起動する機能については、『製品ガイド（共通編）』の「2章 BIOS」—「Wakeup on LAN を有効にする」をご覧ください。

- 1 管理者アカウントでサインインします。
 - 2 「コントロールパネル」ウィンドウ（→P.6）を表示します。
 - 3 「システムとセキュリティ」→「システム」の順にクリックします。
 - 4 画面左側のメニューで「デバイスマネージャー」をクリックします。
「デバイスマネージャー」が表示されます。
 - 5 「ネットワークアダプター」をダブルクリックします。
 - 6 次のデバイスをダブルクリックします。
Intel(R) Ethernet Connection I219-LMまたは、Intel(R) I210 Gigabit Network Connection
・「Intel(R) I210 Gigabit Network Connection」を選択した場合は、次の設定を行ってください。
 1. 「詳細設定」タブをクリックします。
 2. プロパティを「PMEをオンにする」、値を「オン」に設定します。
 - 7 「電源の管理」タブをクリックします。
 - 8 WoL 機能を有効にするには次の項目にチェックを付け、無効にするにはチェックを外します。
 - ・電力の節約のために、コンピューターでこのデバイスの電源をオフにできるようにする
 - ・このデバイスで、コンピューターのスタンバイ状態を解除できるようにする
-  **POINT**
 - ▶ マジックパケットを受信したときのみ省電力状態からレジュームさせるようにするには、「Magic Packetでのみ、コンピューターのスタンバイ状態を解除できるようにする」にもチェックを付けます。
- 9 「OK」をクリックします。

2.3.2 電源を切る

ここでは、Windowsを終了させてワークステーション本体の電源を切る方法を説明します。

■ 注意事項

- 電源を切る前に、すべての作業を終了し必要なデータを保存してください。
- 電源を切る前に、あらかじめディスクを取り出してください（→P.26）。
- 電源を切った後、すぐに電源を入れないでください。必ず30秒以上たってから電源を入れるようにしてください。
- 長期間使用しない場合、または電源を完全に切断する場合は、ワークステーション本体の電源を切り、電源プラグをコンセントから抜いてください。

■ 電源の切り方


次のいずれかの方法で、ワークステーション本体の電源を切ります。

□ Windowsを終了する

- 1 「スタート」ボタン→ （電源）の順にクリックします。
- 2 「シャットダウン」をクリックします。


POINT

- ▶ 電源ボタンを押してもWindowsを終了できます。
 1. 電源ボタン（→P.9）を押します。

ご購入時の設定では、しばらくするとWindowsが終了し、ワークステーション本体の電源が自動的に切れます。
 - 電源ボタンは4秒以上押さないでください。電源ボタンを4秒以上押すと、Windowsが正常終了せずにワークステーション本体の電源が切れてしまいます。
 - 電源ボタンを押したときの動作を変更するには、「 電源プランの設定を変更する」（→P.21）をご覧ください。

□ 完全に電源を切る


重要

- ▶ 次のような場合は、ここで説明している手順でワークステーションの電源を切ってください。
 - ・ BIOS セットアップを起動する
 - ・ 診断プログラムを使用する
 - ・ フラッシュメモリディスクデータ消去
- 1 「スタート」ボタン→ （設定）→「更新とセキュリティ」の順にクリックします。
 - 2 画面左側のメニューで「回復」をクリックします。
 - 3 画面右側のメニューで「今すぐ再起動」をクリックします。
 - 4 「PCの電源を切る」をクリックします。

2.3.3 省電力設定

使用状況にあわせて電源プランを切り替えることで、消費電力を節約できます。


■ 電源プランを切り替える

- 1 「スタート」ボタン→  (設定) → 「システム」の順にクリックします。
- 2 画面左側のメニューで「電源とスリープ」をクリックします。
- 3 画面右側の「関連設定」の「電源の追加設定」をクリックします。
「電源オプション」が表示されます。
- 4 お使いになる電源プランをクリックします。

□ 新規に電源プランを作成する場合

- 1 「電源オプション」ウィンドウ左のメニューで「電源プランの作成」をクリックします。
「電源プランの作成」ウィンドウが表示されたら、メッセージに従って操作します。

■ 電源プランの設定を変更する

- 1 「スタート」ボタン→  (設定) → 「システム」の順にクリックします。
- 2 画面左側のメニューで「電源とスリープ」をクリックします。
- 3 画面右側の「関連設定」の「電源の追加設定」をクリックします。
「電源オプション」が表示されます。
- 4 設定を変更するプランの「プラン設定の変更」をクリックします。
- 5 「詳細な電源設定の変更」をクリックします。
- 6 リストから項目を選択し、設定を変更します。

POINT

- ▶ 一部の設定は手順1や手順2で表示される画面でも変更できます。

- 7 「OK」をクリックします。

2.3.4 UPSを使用する場合

UPS（Uninterruptible Power Supply）や、UPSの制御アプリを本ワークステーションでお使いになる場合、電源プランの設定を変更（→P.21）し、必ず省電力機能を無効にしてください。設定変更を行わないと、省電力機能が働いて休止状態になり、UPSが誤動作するおそれがあります。

また、UPSからの給電再開時のワークステーションの動作については、BIOSセットアップの「IPMI管理」メニューの「AC通電再開時の動作」で設定します。BIOSセットアップメニューについては、『BIOSセットアップメニュー一覧』をご覧ください。

2.4 光学ドライブ

ここでは、光学ドライブとCD／DVDなどのディスクの取り扱いについて説明しています。
ディスクの取り扱いについては、お使いのディスクのマニュアルをご覧ください。
また、光学ドライブの仕様については、「5.4 光学ドライブ」（→P.55）をご覧ください。

2.4.1 注意事項

- 光学ドライブにアクセス中は、振動や衝撃を与えないでください。故障の原因となります。
- 市販のクリーニングディスクやレンズクリーナーを使うと、逆にゴミを集めてしまい、光学ドライブのレンズが汚れてしまう場合があります。故障の原因となりますので絶対に使わないでください。

2.4.2 使用できるディスク

■ 注意事項

- 直径8cmまたは直径12cm、厚さ1.14mm～1.5mmの円形のディスクのみ使用できます。ただし、直径8cmのディスクは、読み込みにのみ対応しています。それ以外のディスクは使用しないでください。故障の原因となります。
- ゆがんだディスク、重心の偏ったディスク、割れたディスク、ヒビの入ったディスクは使用しないでください。故障の原因となります。
- 記載されているディスクが販売されていない場合もあります。

■ 使用できるディスク

ディスク	読込	書込	書換
CD-ROM	○	×	×
音楽CD	○	×	×
ビデオCD	○	×	×
CD-R	○	○	×
CD-RW ^{注1}	○	○	○
DVD-ROM	○	×	×
DVD-Video	○	×	×
DVD-R（4.7GB）	○	○	×
DVD-R DL（8.5GB） ^{注2}	○	○	×
DVD-RW	○	○	○
DVD+R（4.7GB）	○	○	×
DVD+R DL（8.5GB）	○	○	×
DVD+RW（4.7GB）	○	○	○
DVD-RAM（4.7GB/9.4GB） ^{注3}	○	○	○

注1：Ultra Speed CD-RWディスクは使用できません。

注2：追記はできません。また追記されたディスクの読み込みは保証しません。

注3：・カートリッジに入れた状態で使用するタイプ（Type1）は使用できません。
・2.6GBおよび5.2GBのディスクは使用できません。

■ 推奨ディスク

光学ドライブで書き込みや書き換えを行う場合は、次のディスクの使用をお勧めします。それぞれのディスクの詳しい仕様については、各メーカーのホームページなどをご覧ください。

ディスク種別	メーカー	型名
CD-R	Verbatim（バーベイトム）	SR80SP10V1、SR80SP20V1
CD-RW	Verbatim（バーベイトム）	SW80EU5V1、SW80QU5V1、SW80QM5V1、SW80QP5V1
DVD-R	Verbatim（バーベイトム）	DHR47J10V1、DHR47JM10V1、DHR47JP10V1
DVD-R DL	Verbatim（バーベイトム）	DHR85HP5V1、DHR85HP10V1、DHR85HP10SV1
DVD-RW	Verbatim（バーベイトム）	DHW47Y10V1
DVD+R DL	Verbatim（バーベイトム）	DTR85HP5V1、DTR85HP10V1
DVD+RW	ソニー	5DPW47HPS
DVD-RAM	パナソニック	LM-HC47LW5（4.7GB、カートリッジ無）、LM-HB94L（9.4GB、カートリッジ有、取り出し可）

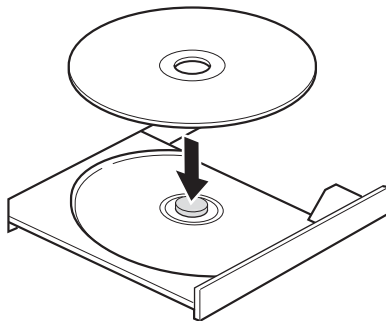
2.4.3 ディスクをセットする

1 トレーを開きます。

ディスク取り出しボタン（→P.9）を押し、少し出てきたトレーの中央を持って静かに引き出します。

2 ディスクをトレーに載せます。

ディスクのレーベル面を上にしてトレー中央の突起にディスクの穴を合わせ、「パチン」と音がするまではめ込みます。



重要

- ▶ ディスクをトレーの金属部に押し付けしないでください。金属部と接触すると、ディスクに傷が付く原因となります。

3 トレーを閉じます。

「カチッ」と音がするまで、トレーを静かに押し込みます。

重要

- ▶ トレーに指などをはさまないようにしてください。けがの原因となります。

POINT

- ▶ 光学ドライブにディスクをセットして「PC」ウィンドウの光学ドライブアイコンをクリック（設定によってはダブルクリック）すると、ワークステーションがディスクを認識する前にトレーが自動的に開くことがあります。
ディスクをセットした後30秒程度待ち、ディスクの操作を行ってください。

2.4.4 ディスクを取り出す

ディスクを取り出す前に、次のことを確認してください。

- アプリがディスクを使用していないこと。
アプリの機能を使ってトレイを開くか、アプリを終了してください。詳しくはお使いのアプリのマニュアルをご覧ください。
- ディスク上のファイルを開いていないこと。
ファイルを閉じてください。

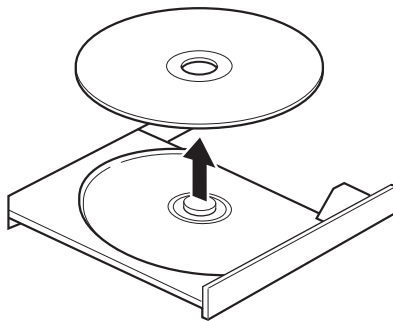
上記の項目を確認してもトレイが開かない場合は、本ワークステーションを再起動してください。本ワークステーションを再起動してもトレイが開かない場合は、「**■** トレーを強制的に開く」（→P.27）をご覧ください。

1 トレーを開きます。

ディスク取り出しボタン（→P.9）を押し、少し出てきたトレイの中央を持って静かに引き出します。

2 ディスクを取り出します。

トレイ中央の突起を押さえながらディスクのふちを持ち上げて、ディスクを外します。



3 トレーを閉じます。

「カチッ」と音がするまで、トレイを静かに押し込みます。



- ▶ トレーに指などをはさまないようにしてください。けがの原因となります。

■ トレーを強制的に開く

「2.4.4 ディスクを取り出す」（→P.26）の手順でトレーが開かない場合は、次の手順でトレーを開きます。

重要

▶ どうしてもトレーが開かない場合にのみ実行してください。

- 1 ワークステーション本体の電源を切ります。
- 2 強制取り出し穴（→P.9）に、太めのペーパークリップを伸ばしたものなどを、トレーが少し出てくるまで押し込みます。
- 3 トレーを静かに引き出します。

2.4.5 ディスクに書き込む

記録可能ディスクに書き込むには「Roxio Creator」を使用します。詳しくは、次の手順で「Roxio Creator」のヘルプをご覧ください。


- 1 「スタート」ボタン→「Roxio Creator LJ」の順にクリックします。
- 2 「ヘルプ」メニュー→「ヘルプ」の順にクリックします。

POINT

- ▶ DVD-RAMはフォーマットすることにより、USBメモリのように直接エクスプローラーなどで書き込むことができます。DVD-RAMをフォーマットするには「■ DVD-RAMをフォーマットする」（→P.28）をご覧ください。

■ 注意事項

- 本ワークステーションで作成したディスクは、ディスクの種類や書き込み形式などにより他の機器では使用できない場合があります。お使いの機器で利用できるディスクの種類や書き込み形式などについては、お使いの機器のマニュアルをご覧ください。また、ディスクの記録状態によっても使用できない場合があります。
- 光学ドライブにディスクをセットしてすぐに操作をすると、ワークステーションがディスクを認識する前にトレーが自動に開くことがあります。
ディスクをセットした後30秒程度待ち、ディスクが使用可能になってから操作を行ってください。
- ディスクに書き込み中は、ワークステーション本体の電源を切ったり、再起動したり、ディスク取り出しボタンを押したりしないでください。また、省電力状態にもしないでください。
- ディスクへの書き込みには高い処理能力が必要です。ディスクに書き込み中は、他のアプリを使用しないことをお勧めします。

- 自動再生が有効に設定されていると、ディスクへの書き込みができない場合があります。その場合は次の手順で自動再生を無効に設定してください。
 1. 「スタート」ボタン→（設定）→「デバイス」の順にクリックします。
 2. 画面左側のメニューで「自動再生」をクリックします。
 3. 画面右側の「すべてのメディアとデバイスで自動再生を使う」をオフにします。
- 「Roxio Creator」は、パケットライトによる書き込みには対応していません。
- 外付け光学ドライブをお使いになる場合も、外付け光学ドライブに添付されている「Roxio Creator」ではなく、本ワークステーションの「Roxio Creator」をお使いください。
- DVD+R DLにデータを書き込む場合、DVD-ROMとの互換性を高めるために「Extended Partial Lead-out」（約512MB）が書き込まれます。このため、書き込み可能な最大容量は約7.99GBとなります。

■ DVD-RAMをフォーマットする

DVD-RAMを初めてお使いになる場合や、すべてのデータを消去する場合は次の手順でDVD-RAMをフォーマットします。

POINT

- ▶ 両面タイプのDVD-RAMディスクは片面ごとにフォーマットします。

- 1 フォーマットするDVD-RAMをセットします（→P.25）。
- 2 「スタート」ボタンを右クリックし、「エクスプローラー」をクリックします。
- 3 ウィンドウ左の「PC」をクリックします。
- 4 光学ドライブを右クリックし、「フォーマット」をクリックします。
- 5 必要に応じて「ファイルシステム」などを設定します。
- 6 「開始」をクリックし、以降は表示されるメッセージに従います。

2.5 通信

ここでは本ワークステーションの通信機能について説明しています。
ネットワーク機器を接続してお使いになる場合は、お使いのネットワーク機器のマニュアルもご覧ください。また、搭載されている通信機能の仕様については、「5.1 本体仕様」（→P.46）をご覧ください。

POINT

- ▶ 本ワークステーションには、ネットワーク環境を簡単に切り替えられるユーティリティ「Plugfree NETWORK」が添付されています。
『製品ガイド（共通編）』の「1章 アプリ」－「1.2.1 「ドライバズディスク検索」からのインストール」をご覧ください。また、「Plugfree NETWORK」をインストールしてください。
また、「Plugfree NETWORK」の詳しい使い方は、次の操作で表示されるヘルプをご覧ください。
1. 「スタート」ボタン→「Plugfree NETWORK」→「ネットワーク診断」の順にクリックします。

2.5.1 有線LAN

LANケーブルを接続する方法については、「3.2.4 LANコネクタ」（→P.42）をご覧ください。
LANの設定については、ネットワーク管理者に確認してください。

■ 有線LANの構成

本ワークステーションは、OSから使用できる2つのLANコントローラーとiRMC用LANコントローラーを持っており、3つのMACアドレスを有します（図1）。
そのため、LANコネクタ1とLANコネクタ2の両方をネットワークに接続して利用する場合、3つのIPアドレスを必要とします。
iRMCをご利用になる場合は、『iRMC（リモートマネージメントコントローラ）』をご覧ください。
本ワークステーションをネットワークに参加させるときには、次の重要事項を必ず守ってください。

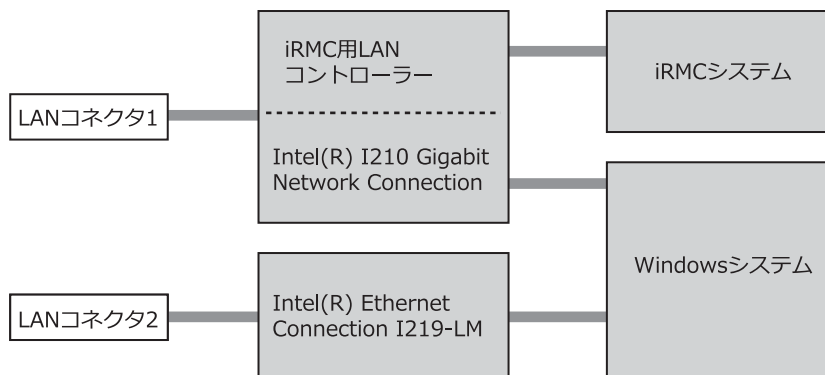


図1) CELSIUS C780のLANコントローラーとLANコネクタの接続体系

- LANコネクタ1とLANコネクタ2を別のサブネットに分けてください

LANコネクタ1は、ワークステーションの動作監視などに使う目的の「管理用LANコネクタ」です。LANコネクタ1は、LANコネクタ2とは別のサブネットに分け、管理向けのネットワークを別途構築するようにしてください。また、LANコネクタ1上の2つのLANコントローラーも別のサブネットに分けることを推奨します。

管理用ネットワークを構築しない（iRMCのリモート管理機能を使用しない）場合は、LANコネクタ1にはLANケーブルを接続しないか、BIOSセットアップの「IPMI管理」メニューの「iRMC LAN」を「使用しない」に設定変更してください。

BIOSセットアップメニューについては、『BIOSセットアップメニュー 一覧』をご覧ください。

- リモート接続はLANコネクタ2を使用してください

リモート接続などの業務用途には、必ずLANコネクタ2を使用してください。

LANコネクタ1は管理ネットワーク用のLANコネクタです。また、OSと接続できるLANコントローラーとiRMC用LANコントローラーが共有しているため、両者が同時に通信を行うと一時的な通信遅延（内部の切り替えによるレイテンシの増加）や通信速度の低下が起こることがあります。これは本装置の仕様です。

- 本ワークステーションの出荷時設定は「DHCP」です

本ワークステーションは、3つのLANコントローラーすべての出荷時設定が「DHCP」になっています。

重要

- ▶ 固定IPで運用する場合は、ネットワークに接続する前に必ずIPアドレスの指定を行ってください。

本ワークステーションを何も設定せずにネットワークに接続すると、同時に3つのIPアドレスを取得するため、複数の装置を同時に接続するとIPアドレス資源が枯渇するおそれがあります。

なお管理ネットワークを構築する場合は、監視対象装置の判別を容易にするため、固定IPでの運用を強く推奨します。

- 3つのLANコントローラーには、異なるIPアドレスを振り分けてください

本ワークステーションのLANコネクタは2つですが、3つのLANコントローラーを持っています。3つのLANコントローラーには、それぞれ別々のIPアドレスを振り分けてください。同一のIPアドレスを割り当てると、IPアドレスの競合が発生し、ネットワーク障害の原因となります。

■ 注意事項

- Link速度を1000Mbpsに固定して接続することはできません。
- Link速度を100/10Mbpsに固定して接続する場合、オートネゴシエーションのみサポートしているネットワーク機器では、「デュプレックス」の設定は「半二重／Half Duplex」に設定してください。「全二重／Full Duplex」に設定すると、次のような問題が発生する場合があります。
 - ・ Linkランプが点灯しない
 - ・ 通信できない
 - ・ 通信速度が異常に遅い

- 本ワークステーションに搭載されている LAN デバイスには節電機能があります。この機能は、Windowsの省電力機能によってディスプレイの電源が切れると、通信速度を下げることにより電力消費を抑えるものです。
節電機能が有効に設定されていると、次の条件にすべて一致する環境でお使いの場合に、Windowsの省電力機能によってディスプレイの電源が切れるときに通信エラーが発生することがあります。
 - ・ LAN デバイスの設定で、「速度とデュプレックス」が「オートネゴシエーション」に設定されているとき（ご購入時の設定）
 - ・ 本ワークステーションを、オートネゴシエーションが可能なネットワーク機器と接続しているときこれにより問題がある場合は、「■ LANデバイスの節電機能の設定を変更する」（→P.31）をご覧ください。この機能を無効に設定してください。（本ワークステーションの節電設定は、ご購入時は有効に設定されています。）

■ LANデバイスの節電機能の設定を変更する

LANデバイスの節電機能の設定を変更するには、次の操作を行います。

- 1 管理者アカウントでサインインします。
- 2 「コントロールパネル」ウィンドウ（→P.6）を表示します。
- 3 「システムとセキュリティ」→「システム」の順にクリックします。
- 4 画面左側のメニューで「デバイスマネージャー」をクリックします。
「デバイスマネージャー」が表示されます。
- 5 「ネットワークアダプター」をダブルクリックします。
- 6 次のデバイスをダブルクリックします。
Intel(R) Ethernet Connection I219-LM
- 7 「詳細設定」タブをクリックします。
- 8 「プロパティ」で「システム無動作時の節電機能」をクリックし、「値」で「有効（オン）」または「無効（オフ）」を選択します。
- 9 「OK」をクリックします。

2.6 フラッシュメモリディスク

ここでは、フラッシュメモリディスクのフォーマット手順について説明します。

2.6.1 フラッシュメモリディスクをフォーマットする

「ディスクの管理」でフラッシュメモリディスクの領域を設定し、フォーマットします。

- 1 管理者アカウントでサインインします。
- 2 「コントロールパネル」ウィンドウ（→P.6）を表示します。
- 3 「システムとセキュリティ」→「管理ツール」の順にクリックします。
- 4 「コンピューターの管理」をダブルクリックします。
「コンピューターの管理」ウィンドウが表示されます。
- 5 ウィンドウ左のツリーメニューで「記憶域」の「ディスクの管理」をクリックします。
「ディスクの初期化」ウィンドウが表示されます。

POINT

- ▶ ディスクがあらかじめ初期化されている場合は、「ディスクの初期化」ウィンドウは表示されません。
 - ▶ 「ディスクの初期化」ウィンドウが表示されない場合は、初期化するディスクの名称上で右クリックし、「ディスクの初期化」を選択すると、「ディスクの初期化」ウィンドウが表示されます。
- 6 「ディスクの選択」に表示されているディスクがフォーマット対象のディスクであることを確認のうえ、チェックボックスにチェックを付けます。

POINT

- ▶ 「ディスクの初期化」ではパーティションスタイルをMBR（マスター ブートレコード）に設定することをお勧めします。
- 7 「OK」をクリックします。
 - 8 画面に表示されたフラッシュメモリディスクの未割り当て領域を右クリックし、「新しいシンプル ボリューム」をクリックします。
 - 9 「新しいシンプル ボリューム ウィザード」が表示されたら、メッセージに従って必要な設定を行いフォーマットします。

重要

- ▶ 「クイックフォーマットする」にチェックを付けていない場合は、フォーマット終了まで長時間かかります。時間に余裕を持って作業を行ってください。

2.7 セキュリティチップ（TPM）

セキュリティチップ（TPM）は、ドライブを暗号化したときの暗号鍵などの重要なデータを格納・管理するための特別なICチップです。暗号鍵などをフラッシュメモリディスクに残さないため、フラッシュメモリディスクが盗まれても暗号を解析できません。

2.8 ステータスマニター

対 象 iRMC（リモートマネージメントコントローラ）をお使いの場合

ステータスマニターを使用すると、温度／FANの状態について簡単に確認できます。
警告発生時は、速やかにシステム管理者に連絡してください。

ドライバーおよびアプリのインストールについては、『製品ガイド（共通編）』の「1章 アプリ」－「インストール」をご覧ください。

2.8.1 センサーの状態確認

「各デバイスの現在の状態」で、各センサーの状態を確認します。

- 1 「スタート」ボタン→「FUJITSU - ステータスマニター」→「ステータスマニター」の順にクリックします。
「各デバイスの現在の状態」が表示されます。

ステータスマニター - 各デバイスの現在の状態

各デバイスの現在の状態

各デバイスの現在の状態(2015年5月22日 6:36)(L):

デバイス名	現在の状態
温度センサー(Ambient)	Safe
温度センサー(Air-Inlet)	Safe
温度センサー(PCH)	Safe
温度センサー(CPU)	Safe
温度センサー(MEM A)	Safe
温度センサー(MEM B)	Safe

装置情報

型名(M) CELSIUS C780

製造号機(S) MA00000001

[システム情報を開く](#)

IDランプ

現在のIDランプの状態を取得する(S)

点灯する(N)

消灯する(E)

消灯

取得時間: 2015年5月22日 6:36

[閉じる\(C\)](#)

デバイス名	温度センサー／FANセンサーが表示されます。	
現在の状態	各センサーの状態が表示されます。 ・ safe：センサーに異常は記録されていません。 ・ safe (過去に異常あり)： 警告状態が発生し、コンピューター利用者が警告発生を無視した場合などに表示されます。 ・ fail：警告状態です。	
装置情報	型名	本ワークステーションの品名が表示されます。
	製造号機	本ワークステーションの製造号機が表示されます。
	システム情報を開く	クリックすると、Windowsのシステム情報画面を表示します。
IDランプ	ワークステーション本体にあるIDランプの点灯／消灯を行います。	
	現在のIDランプの状態を取得する	クリックすると、現在のIDランプの点灯状態を取得し、アイコン表示を更新します。
	点灯する	クリックすると、IDランプを点灯します。
	消灯する	クリックすると、IDランプを消灯します。

□ IDランプの状態を確認する

「各デバイスの現在の状態」のIDランプのアイコンの表示状態で、ワークステーション本体にあるIDランプの状態を確認することができます。

● IDランプ消灯時



● IDランプ点灯時



■ 異常検知時の画面

異常を検知すると、次の画面が表示されます。

● FANセンサー異常時

ステータスマニター - 警告

FANセンサー (FAN1 GFX)が異常を検知しました。
システム管理者にご連絡ください。
詳細は「イベントビューアー」の「アプリケーションとサービス」に記録しました。
発生時刻: 2015年5月22日 6:39

装置情報

型名(M)

CELSIUS C780

製造号機(S)

MA000000001

システム情報を開く

IDランプ

消灯

現在のIDランプの状態を取得する(S)

点灯する(N)

消灯する(E)

取得時刻: 2015年5月22日 6:39

上記の内容を確認したら「確認しました」を押してこの画面を閉じてください。
後で再度確認する場合には「後で通知する」を押してください。

確認しました(Q)

後で通知する(C)

● 温度センサー異常時

ステータスマニター - 警告

温度センサー (Ambient)が異常を検知しました。
システム管理者にご連絡ください。
詳細は「イベントビューアー」の「アプリケーションとサービス」に記録しました。
発生時刻: 2015年5月22日 6:42

装置情報

型名(M)

CELSIUS C780

製造号機(S)

MA000000001

システム情報を開く

IDランプ

消灯

現在のIDランプの状態を取得する(S)

点灯する(N)

消灯する(E)

取得時刻: 2015年5月22日 6:42

上記の内容を確認したら「確認しました」を押してこの画面を閉じてください。
後で再度確認する場合には「後で通知する」を押してください。


確認しました(Q)

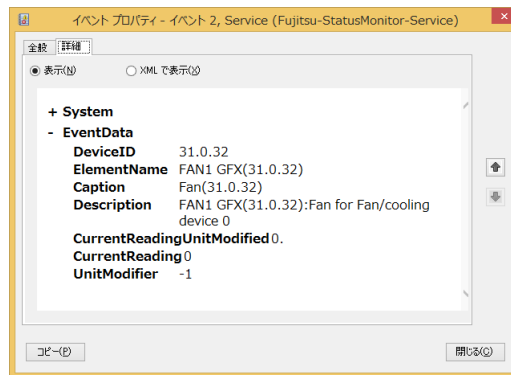
後で通知する(C)

異常を検知したデバイスの情報を通知するとともに、Windowsのイベントログに検知したセンサーと時間などを記録します。

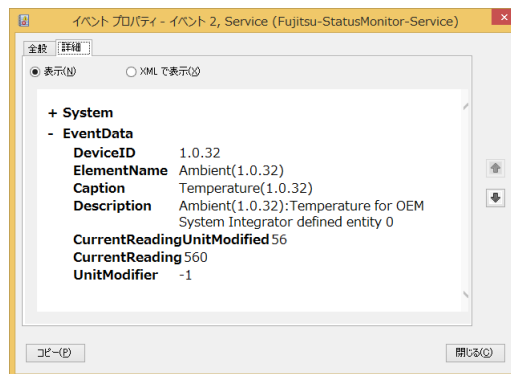
また、iRMCのイベントログ（SEL）にも情報が記録されます。正確な情報は『iRMC（リモートマネジメントコントローラ）』の「エラーメッセージ」をご覧ください。

重要

- ▶ Windowsのイベントビューアーは次の操作で表示することができます。
 1. 【】 + 【X】 キーを押し、表示されたメニューから「イベントビューアー」をクリックします。
- ▶ Windowsのイベントログに記録される時間とiRMCのイベントログ（SEL）に記録される情報は、同じではありません。
- ▶ ステータスマニターでは短時間に発生する同一エラーをフィルター処理し、各センサーの監視間隔がiRMCと異なります。
- ▶ Windowsのイベントログの「詳細」には、次のような内容が表示されます。
 - ・ 例：FANセンサー



- ・ 例：温度センサー



iRMCから読み取ったデータを表示します。

DeviceID	センサーごとにDeviceとして表示
ElementName	iRMCのセンサー名
Caption	センサーの種類 ・ Fan (xx.x.xx) : FANセンサー ・ Temperature (xx.x.xx) : 温度センサー
CurrentReadingUnitModified	読み取り値から換算した値 ・ FANの単位は (rpm) ・ 温度の単位は (℃)

3

第3章

周辺機器

周辺機器の取り付け方法や注意事項を説明しています。

3.1 周辺機器を取り付ける前に	38
3.2 コネクタの接続／取り外し	39

3.1 周辺機器を取り付ける前に

ここでは、周辺機器を取り付ける前に知っておいていただきたいことを説明しています。必ずお読みください。

3.1.1 注意事項

- 本ワークステーションに対応している弊社純正品をお使いください。詳しくは、富士通製品情報ページ内にある「システム構成図」（<http://www.fmworld.net/biz/fmv/product/syskou/>）をご覧ください。
- お使いになる周辺機器のマニュアルもあわせてご覧ください。
- 操作に必要な箇所以外は触らないでください。故障の原因となります。
- 周辺機器の取り付け／取り外しは、Windowsのセットアップが完了してから行ってください。
- お使いになる周辺機器によっては、取り付け後にドライバーなどのインストールや設定が必要な場合があります。詳しくは周辺機器のマニュアルをご覧ください。
- 一度に取り付ける周辺機器は1つだけにしてください。一度に複数の周辺機器を取り付けると、ドライバーのインストールなどが正常に行われないことがあります。1つの周辺機器の取り付けが終了して、動作確認を行った後、別の周辺機器を取り付けてください。
- 一般的には周辺機器の電源を入れてからワークステーション本体の電源を入れ、ワークステーション本体の電源を切ってから周辺機器の電源を切ります。ただし、周辺機器によっては逆の順序が必要な場合があります。詳しくは周辺機器のマニュアルをご覧ください。

3.2 コネクタの接続／取り外し

ここでは、周辺機器を接続したり、取り外したりする一般的な方法について説明しています。

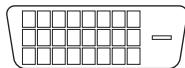
接続する周辺機器やケーブルのマニュアルもあわせてご覧ください。また、それぞれのコネクタの仕様については、「5.1 本体仕様」（→P.46）をご覧ください。

必ず「3.1 周辺機器を取り付ける前に」（→P.38）をお読みになってから作業をしてください。

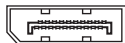
3.2.1 注意事項

- ご購入時の構成によっては、記載されているコネクタの一部は搭載されていません。
- 周辺機器のコネクタの形状によっては、接続できなかったり、隣接するコネクタに接続された周辺機器と干渉したりする場合があります。周辺機器を接続する前に確認してください。
- 周辺機器によっては、接続したり取り外したりするときに、コネクタの仕様にかかわらずワークステーション本体の電源を切る必要があるものがあります。詳しくは周辺機器のマニュアルをご覧ください。

3.2.2 ディスプレイコネクタ



DVI-D コネクタ



DisplayPort コネクタ



Mini DisplayPort コネクタ

ディスプレイを接続します。ワークステーション本体の電源を切ってから接続してください。

■ 接続する

- 1 ワークステーション本体の電源を切ります。
- 2 ディスプレイコネクタに、ディスプレイのケーブルを接続します。
コネクタの形を互いに合わせまっすぐに差し込んでください。
DVI-D コネクタをお使いの場合、コネクタのネジを締めてください。
- 3 ディスプレイの電源を入れてから、ワークステーション本体の電源を入れます。

■ 取り外す

重要

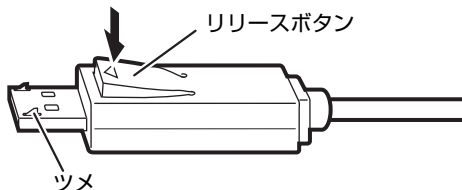
- ▶ マルチディスプレイ機能（→P.15）をお使いになっている場合は、取り外すディスプレイに画面が表示されないようにしてからディスプレイを取り外してください。

□ DVI-D コネクタ

- 1 ワークステーション本体の電源を切ってから、ディスプレイの電源を切ります。
- 2 ケーブルのコネクタをまっすぐに引き抜きます。
コネクタのネジを緩めてからケーブルを引き抜いてください。

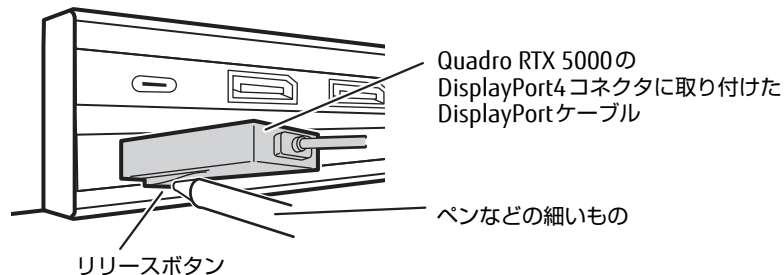
□ DisplayPort コネクタ／Mini DisplayPort コネクタ

- 1 ワークステーション本体の電源を切ってから、ディスプレイの電源を切ります。
- 2 ケーブルのリリースボタンを押しながら、まっすぐに引き抜きます。
リリースボタンを押すことでツメが引っ込み、ワークステーション本体から外れます。



重要

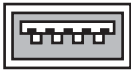
- ▶ Quadro RTX 5000のDisplayPort 4コネクタ（→P.11）から取り外すときの注意
Quadro RTX 5000のDisplayPortは、ケーブルのリリースボタンが下向き状態で取り付けられます。
Quadro RTX 5000のDisplayPort4コネクタに取り付けた場合、隙間が狭くリリースボタンまで指がとどかないことがあります。
その場合は、ペンなど細い物を使用してリリースボタンを押しながら引き抜いてください。



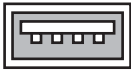
3.2.3 USB コネクタ



VirtualLink コネクタ



USB 3.0 Type-A コネクタ（青色）



USB 2.0 Type-A コネクタ（黒色）

USB 対応周辺機器を接続します。ワークステーション本体の電源を入れたまま接続、取り外しできます。

■ 接続する


- 1 USB コネクタに、USB 対応周辺機器のケーブルを接続します。
コネクタの形を互いに合わせまっすぐに差し込んでください。

POINT

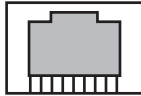
- ▶ VirtualLink コネクタ
 - ・ どちらの向きでも差し込むことができます。
 - ・ VirtualLink 対応機器以外の接続はサポートしていません。

■ 取り外す

重要

- ▶ USB 対応周辺機器によっては、取り外す前に「ハードウェアの安全な取り外し」の操作が必要になる場合があります。詳しくはお使いの USB 対応周辺機器のマニュアルをご覧ください。
- 1 「ハードウェアの安全な取り外し」が必要な場合は次の操作を行います。
 1. デスクトップ画面右下の通知領域にある「ハードウェアの安全な取り外し」アイコン（) をクリックします。
 2. 取り外すデバイスをクリックし、表示されるメッセージに従ってデバイスを停止します。
 - 2 ケーブルのコネクタをまっすぐに引き抜きます。

3.2.4 LAN コネクタ



LANケーブルを接続します。ワークステーション本体の電源を入れたまま接続、取り外しできます。

ただし、電源を入れたまま接続すると、LANが使用可能になるまで時間がかかる場合があります。

LEDの意味は、次のとおりです。



	左LED (Link/Act)	右LED (Speed)
1000MbpsでLinkを確立	緑色点灯 ^注	オレンジ点灯
100MbpsでLinkを確立	緑色点灯 ^注	緑色点灯
10MbpsでLinkを確立	緑色点灯 ^注	消灯

注：データ転送中は緑色点滅



- ▶ 1000BASE-Tの通信を行うためには、1000BASE-Tに対応したネットワーク機器とエンハンスドカテゴリ 5（カテゴリ 5E）以上のLANケーブルを使用してください。

■ 接続する

- 1 LANコネクタにネットワーク機器のケーブルを接続します。
コネクタの形を互いに合わせ、「カチッ」と音がするまでまっすぐに差し込んでください。

■ 取り外す

- 1 ケーブルのツメを押さえながら、まっすぐに引き抜きます。

4

第4章

お手入れ

快適にお使いいただくためのお手入れ方法を説明しています。

4.1 日常のお手入れ	44
-------------------	----

4.1 日常のお手入れ

ワークステーション本体や周辺機器を長時間使用していると、汚れが付いたり、ほこりがたまったりします。ここでは、日常のお手入れのしかたを説明しています。

4.1.1 ワークステーション本体の表面の汚れ

乾いた柔らかい布で拭き取ってください。

汚れがひどい場合は、水または水で薄めた中性洗剤を含ませた布を、固く絞って拭き取ってください。中性洗剤を使用して拭いた場合は、水に浸した布を固く絞って中性洗剤を拭き取ってください。

重要

- ▶ 拭き取るときは、内部に水が入らないよう充分に注意してください。
- ▶ シンナーやベンジンなど揮発性の強いものや、化学ぞうきんは使わないでください。損傷する原因となります。

5

第5章 仕様

本製品の仕様を記載しています。

5.1 本体仕様	46
5.2 CPU	52
5.3 ディスプレイ	54
5.4 光学ドライブ	55

5.1 本体仕様

お使いのモデルの仕様一覧をご確認ください。
また、次の対応表でお使いの機種に搭載されているCPUと対応した列をご確認ください。

CPU名称	仕様一覧表の表記
インテル® Xeon® E-2176G プロセッサー	E-2176G
インテル® Xeon® E-2174G プロセッサー	E-2174G
インテル® Xeon® E-2124 プロセッサー	E-2124

5.1.1 CELSIUS C780

CELSIUS C780					
対応CPU		E-2176G	E-2174G	E-2124	
CPU ^{注1}	動作周波数		3.70GHz	3.80GHz	3.30GHz
		最大 ^{注2}	4.70GHz	4.70GHz	4.30GHz
	コア数／スレッド数		6／12	4／8	4／4
	キャッシュメモリ（3次）		12MB	8MB	
チップセット		インテル® C246			
システムバス／メモリバス		8GT/s DMI3 ^{注3} ／2666MHz			
メインメモリ		標準8GB（8GB×1） ^{注4} ／最大128GB （DDR4 SDRAM/PC4-2666 DIMM ECCあり）			
メモリスロット		×4（空きメモリスロット×3）			
表示機能 ^{注5}	グラフィックス アクセラレータ	NVIDIA Quadro P400 ^{注6}			
ストレージ ^{注7}		フラッシュメモリディスク 256GB（シリアルATA） ^{注8注9}			
光学ドライブ		スーパーマルチドライブ（薄型） ^{注10}			
通信機能	LAN	1000BASE-T／100BASE-TX／10BASE-T ^{準拠} ^{注11} 、Wakeup on LAN対応 ^{注12}			
インテル® vPro™ テクノロジー／AMT		—			
セキュリティ機能					
セキュリティチップ（TPM）		TCG Ver 2.0 ^{準拠}			
盗難防止用ロック取り付け穴		なし			
筐体施錠		あり			
インターフェース					
USB ^{注13注14}	Type-A	USB 3.0×3（背面） USB 2.0×2（前面）			
LAN		RJ-45×2			
自己診断（POST時）		あり ^{注15}			

CELSIUS C780				
対応CPU		E-2176G	E-2174G	E-2124
ストレージベイ	光学ドライブ専用ベイ	前面×1（空きベイ×0）		
電源／周波数 ^{注16}		AC100～240V±10%、50/60Hz +2% -4% （入力波形は正弦波のみサポート）		
消費電力				
電源オフ時 ^{注17}		約7.0W		
動作時 ^{注18}	通常時	約24W		
	最大時 ^{注19}	約161W		
	休止時	約6.6W		
最大消費電力		約500W		
定格電流	動作時	最大5.0A（AC100V）／最大2.5A（AC240V）		
外形寸法（突起部含まず）		W 431×D 683×H 43 mm		
質量		約9.9kg（ラックレール約4.1kg）		
電波障害対策		VCCIクラスA		
省エネ法に基づくエネルギー消費効率		富士通製品情報ページ（ http://www.fmworld.net/biz/ ）にある、製品情報の仕様をご覧ください。		
温湿度条件		温度10～35℃／湿度20～80%RH（動作時） 温度-10～60℃／湿度20～80%RH（非動作時） （ただし、動作時、非動作時とも結露しないこと）		
プレインストールOS ^{注20}		Windows 10 Pro for Workstations（64ビット版）		
サポートOS ^{注20注21}		Windows 10 Enterprise LTSC 2019（64ビット版）、 Windows 10 Enterprise（64ビット版）、 Windows 10 Pro for Workstations（64ビット版）		

本ワークステーションの仕様は、改善のために予告なく変更することがあります。あらかじめご了承ください。

- 注1：ソフトウェアによっては、CPU名表記が異なる場合があります。
・本ワークステーションに搭載されているCPUで利用できる主な機能については、「5.2 CPU」（→P.52）をご覧ください。
- 注2：インテル® ターボ・ブースト・テクノロジー 2.0（→P.52）動作時。
- 注3：DMIはDirect Media Interfaceの略です。
- 注4：カスタムメイドの選択によって、次の容量のメモリが搭載されています。
・64GB（16GB×4）
・32GB（8GB×4）
・16GB（8GB×2）
- 注5：グラフィックスカードの仕様については、「5.1.2 グラフィックスカード」（→P.49）をご覧ください。
- 注6：カスタムメイドの選択によって、次のグラフィックスカードが搭載されています。
・Quadro RTX 5000
・Quadro RTX 4000
・Quadro P5000
・Quadro P4000
・Quadro P2000
・Quadro P620
- 注7：容量は、1GB=1000³バイト換算値です。
- 注8：カスタムメイドの選択によって、次のドライブが搭載されています。
・フラッシュメモリディスク512GB（シリアルATA）
・フラッシュメモリディスク512GB（シリアルATA）×2
・フラッシュメモリディスク512GB（シリアルATA）×4
・M.2フラッシュメモリディスク512GB（NVMe）

- 注9：カスタムメイドでSATA-RAIDを選択した場合は次の構成になります。なお、ミラーリングを行うため、使用できるフラッシュメモリディスクの容量は1台分となります。
- ・フラッシュメモリディスク512GB（シリアルATA）×2（RAID1）
 - ・フラッシュメモリディスク512GB（シリアルATA）+フラッシュメモリディスク512GB（シリアルATA）×2（RAID1）
 - ・M.2フラッシュメモリディスク512GB（NVMe）+フラッシュメモリディスク512GB（シリアルATA）×2（RAID1）
- 注10：光学ドライブの仕様は、「5.4 光学ドライブ」（→P.55）をご覧ください。
- 注11：・1000Mbpsは1000BASE-Tの理論上の最高速度であり、実際の通信速度はお使いの機器やネットワーク環境により変化します。
- ・1000Mbpsの通信を行うためには、1000BASE-Tに対応したハブが必要となります。また、LANケーブルには、1000BASE-Tに対応したエンハンストカテゴリ 5（カテゴリ 5E）以上のLANケーブルを使用してください。
- 注12：・1000Mbpsのネットワーク速度しかサポートしていないハブでは、Wakeup on LAN機能は使用できません。
- ・Wakeup on LAN機能を使用する場合は、次の両方でリンク速度とデュプレックス共に自動検出可能な設定（オートネゴシエーション）にしてください。
 - ・本ワークステーションの有線LANインターフェース
 - ・本ワークステーションの有線LANインターフェースと接続するハブのポート
- この両方が自動検出可能な設定になっていない場合、本ワークステーションが省電力状態や電源オフ状態のときにハブやポートをつなぎ変えたり、ポートの設定を変えたりするとWakeup on LAN機能が動作しない場合があります。
- ・省電力状態からのWakeup on LAN機能を使用するには、「■ WoL機能によるレジュームの設定を変更する」（→P.19）をご覧ください。
 - ・電源オフ状態からのWakeup on LAN機能を使用するには、『製品ガイド（共通編）』の「2章 BIOS」—「Wakeup on LANを有効にする」をご覧ください。
- 注13：・すべてのUSB対応周辺機器の動作を保証するものではありません。
- ・長いUSBケーブルを使用してUSBデバイスを接続した場合、USBデバイスが正常に動作しないことがあります。この場合は、USB準拠の短いケーブルをお試しください。
- 注14：外部から電源が供給されないUSB対応周辺機器を接続するときの消費電流の最大容量は次のとおりです。詳しくは、USB対応周辺機器のマニュアルをご覧ください。
- ・USB3.0 Type-Aは、1ポートにつき900mA
 - ・USB2.0 Type-Aは、1ポートにつき500mA
- 注15：起動時の自己診断（POST）で異常が見つかった場合に表示されるメッセージは、『製品ガイド（共通編）』の「3章トラブルシューティング」—「■ 起動時に表示されるエラーメッセージ」をご覧ください。
- 注16：AC200～240V環境でご使用になる場合は、別途AC200～240V（3.6A以上）に対応した電源ケーブルをご用意ください。
- 注17：消費電力を0にするには、電源ケーブルの電源プラグをコンセントから抜いてください。
- 注18：・ご使用になる機器構成により値は変動します。
- ・標準構成でOSを起動させた状態での本体のみの測定値です。
- 注19：・本ワークステーションで選択可能なカスタムメイドの最大構成で測定しています。
- ・測定プログラムは当社独自の高負荷テストプログラムを使用しています。
- 注20：日本語版。
- 注21：・富士通は、本製品で「サポートOS」を動作させるために必要なBIOSおよびドライバーを提供しますが、すべての機能を保証するものではありません。
- ・サポートOSに関する最新の情報については、富士通製品情報ページ内にある「OS関連情報」（<http://www.fmworld.net/biz/fmv/support/os/>）をご覧ください。
 - ・Windowsを新規にインストールする場合は、『製品ガイド（共通編）』の「付録2 Windowsの新規インストールについて」をご覧ください。

5.1.2 グラフィックスカード

■ Quadro RTX 5000

表示機能		
グラフィックスアクセラレータ		Quadro RTX 5000
ビデオメモリ ^{注1}		16GB（GDDR6） ^{注2}
解像度／発色数	DisplayPort	最大7860×4320ドット／最大1677万色
DirectX		12.0
OpenGL		4.6 ^{注3}
インターフェース		
外部ディスプレイ ^{注4}	DisplayPort ^{注5}	20ピン×4
VirtualLink ^{注6}		×1

- 注1：専用ビデオメモリの他、メインメモリの一部をビデオメモリとして使用します。
その容量はメインメモリの容量により変動します。
- 注2：「NVIDIAコントロールパネル」でECCを有効にしている場合、利用できるビデオメモリは減少します。
- 注3：サポートするOpenGLのバージョンは、お使いのディスプレイドライバーによって異なる場合があります。
- 注4：・最大4台まで同時にディスプレイを使用することができます。
ディスプレイ5台接続した場合は、そのうちの4台を選択してお使いください。
・接続するディスプレイによっては、台数や組み合わせに制限があります。
- 注5：HDCPに対応しています。
著作権保護された映像を再生する場合は、HDCP対応のデジタルディスプレイをお使いください。
- 注6：VirtualLink専用です。ディスプレイの接続はサポートしていません。

■ Quadro RTX 4000

表示機能		
グラフィックスアクセラレータ		Quadro RTX 4000
ビデオメモリ ^{注1}		8GB（GDDR6） ^{注2}
解像度／発色数	DisplayPort	最大7860×4320ドット／最大1677万色
DirectX		12.0
OpenGL		4.6 ^{注3}
インターフェース		
外部ディスプレイ ^{注4}	DisplayPort ^{注5}	20ピン×3
VirtualLink ^{注6}		×1

- 注1：専用ビデオメモリの他、メインメモリの一部をビデオメモリとして使用します。
その容量はメインメモリの容量により変動します。
- 注2：「NVIDIAコントロールパネル」でECCを有効にしている場合、利用できるビデオメモリは減少します。
- 注3：サポートするOpenGLのバージョンは、お使いのディスプレイドライバーによって異なる場合があります。
- 注4：接続するディスプレイによっては、台数や組み合わせに制限があります。
- 注5：HDCPに対応しています。
著作権保護された映像を再生する場合は、HDCP対応のデジタルディスプレイをお使いください。
- 注6：VirtualLink専用です。ディスプレイの接続はサポートしていません。

■ Quadro P5000

表示機能		
グラフィックスアクセラレータ		Quadro P5000
ビデオメモリ ^{注1}		16GB（GDDR5X） ^{注2}
解像度／発色数	DisplayPort	最大5120×2880ドット／最大1677万色
	DVI-D	最大2560×1600ドット／最大1677万色 （Dual Link対応ディスプレイ接続時） 最大1920×1200ドット／最大1677万色 （Dual Link非対応ディスプレイ接続時）
DirectX		12.0
OpenGL		4.5 ^{注3}
インターフェース		
外部 ディスプレイ ^{注4}	DisplayPort ^{注5}	20ピン×4
	DVI-D ^{注5}	24ピン×1

- 注1：専用ビデオメモリの他、メインメモリの一部をビデオメモリとして使用します。
その容量はメインメモリの容量により変動します。
- 注2：「NVIDIAコントロールパネル」でECCを有効にしている場合、利用できるビデオメモリは減少します。
- 注3：サポートするOpenGLのバージョンは、お使いのディスプレイドライバーによって異なる場合があります。
- 注4：・最大4台まで同時にディスプレイを使用することができます。
ディスプレイ5台接続した場合は、そのうちの4台を選択してお使いください。
・接続するディスプレイによっては、台数や組み合わせに制限があります。
- 注5：HDCPに対応しています。
著作権保護された映像を再生する場合は、HDCP対応のデジタルディスプレイをお使いください。

■ Quadro P4000／Quadro P2000

表示機能			
グラフィックスアクセラレータ		Quadro P4000	Quadro P2000
ビデオメモリ注1		8GB（GDDR5）	5GB（GDDR5）
解像度／発色数	DisplayPort	最大5120×2880ドット／最大1677万色	
DirectX		12.0	
OpenGL		4.5注2	
インターフェース			
外部ディスプレイ注3	DisplayPort注4	20ピン×4	

- 注1：専用ビデオメモリの他、メインメモリの一部をビデオメモリとして使用します。
その容量はメインメモリの容量により変動します。
- 注2：サポートするOpenGLのバージョンは、お使いのディスプレイドライバーによって異なる場合があります。
- 注3：接続するディスプレイによっては、台数や組み合わせに制限があります。
- 注4：HDCPに対応しています。
著作権保護された映像を再生する場合は、HDCP対応のデジタルディスプレイをお使いください。

■ Quadro P620／Quadro P400

表示機能				
グラフィックスアクセラレータ		Quadro P620	Quadro P400	
ビデオメモリ ^{注1}		2GB（GDDR5）		
解像度／発色数	Mini DisplayPort	最大5120×2880 ドット／最大1677万色		
DirectX		12.0		
OpenGL		4.5 ^{注2}		
インターフェース				
外部ディスプレイ	Mini DisplayPort ^{注3}	20ピン×4	20ピン×3	

注1：専用ビデオメモリの他、メインメモリの一部をビデオメモリとして使用します。
その容量はメインメモリの容量により変動します。

注2：サポートするOpenGLのバージョンは、お使いのディスプレイドライバーによって異なる場合があります。

注3：HDCPに対応しています。

著作権保護された映像を再生する場合は、HDCP対応のデジタルディスプレイをお使いください。

5.2 CPU

本ワークステーションに搭載されているCPUで利用できる主な機能は、次のとおりです。

お使いのワークステーション本体に搭載されているCPUの欄をご覧ください。

機能	インテル® Xeon® E-2176G プロセッサ	インテル® Xeon® E-2174G プロセッサ	インテル® Xeon® E-2124 プロセッサ
インテル® ターボ・ブースト・テクノロジー 2.0	○	○	○
インテル® ハイパースレッディング・テクノロジー	○	○	×
インテル® バーチャライゼーション・テクノロジー	○	○	○
拡張版 Intel SpeedStep® テクノロジー（EIST）	○	○	○
エグゼキュート・ディスエーブル・ビット機能	○	○	○

■ インテル® ターボ・ブースト・テクノロジー 2.0

インテル® ターボ・ブースト・テクノロジー 2.0は、従来のマルチコアの使用状況にあわせてCPUが処理能力を自動的に向上させる機能に加え、高負荷時にパフォーマンスを引き上げるように最適化された機能です。

POINT

- ▶ OSおよびアプリの動作状況や設置環境などにより処理能力は変わります。性能向上量は保証できません。

■ インテル® ハイパースレッディング・テクノロジー

インテル® ハイパースレッディング・テクノロジーは、OS上で物理的な1つのCPUコアを仮想的に2つのCPUのように見せることにより、1つのCPUコア内でプログラムの処理を同時に実行し、CPUの処理性能を向上させる機能です。複数のアプリを同時に使っている場合でも、処理をスムーズに行うことが可能です。

この機能はご購入時には有効に設定されています。設定はBIOSセットアップで変更できます。『BIOSセットアップメニュー一覧』の「詳細」メニューをご覧ください。

POINT

- ▶ OSおよびアプリの動作状況や設置環境などにより処理能力は変わります。性能向上量は保証できません。

■ インテル® バーチャライゼーション・テクノロジー

インテル® バーチャライゼーション・テクノロジーは、本機能をサポートするVMM（仮想マシンモニター）をインストールすることによって、仮想マシンの性能と安全性を向上させるための機能です。

この機能はご購入時には有効に設定されています。設定はBIOSセットアップで変更できます。『BIOSセットアップメニュー一覧』の「詳細」メニューをご覧ください。

■ 拡張版Intel SpeedStep® テクノロジー（EIST）

拡張版Intel SpeedStep® テクノロジーは、実行中のアプリのCPU 負荷に合わせて、Windows がCPUの動作周波数および動作電圧を自動的に低下させる機能です。

POINT

- ▶ この機能により本ワークステーションの性能が低下することがあります。

■ エグゼキュート・ディスエーブル・ビット機能

エグゼキュート・ディスエーブル・ビット機能は、Windowsのデータ実行防止（DEP）機能と連動し、悪意のあるプログラムが不正なメモリ領域を使用すること（バッファオーバーフロー脆弱性）を防ぎます。

データ実行防止（DEP）機能がウイルスやその他の脅威を検出した場合、「[ソフトウェア名称] は動作を停止しました」という画面が表示されます。「プログラムの終了」をクリックし、表示される対処方法に従ってください。

5.3 ディスプレイ

5.3.1 解像度

本ワークステーションが出力可能な解像度です。
お使いのディスプレイが対応している解像度のみ表示できます。お使いのディスプレイのマニュアルをご覧ください。表示可能な解像度を確認してください。
発色数は「32ビット」（約1677万色）です。

POINT

- ▶ お使いのOS、ディスプレイにより、表に記載のない解像度も選択可能な場合があります。リモートアクセス時は、クライアント端末（パソコン／シンクライアント）の最大解像度を超える解像度は表示できません。

解像度	リフレッシュレート（Hz）	対応
1024×768	60	○
1280×1024	60	○
1360×768	60	○
1440×900	60	○
1600×1200	60	○
1680×1050	60	○
1920×1080	60	○
1920×1200	60	○
2560×1440	60	○注1
2560×1600	60	○注1
3840×2160	60	○注2
4096×2160	60	○注2
5120×2880	60	○注2
7860×4320	60	○注2

注1：DisplayPortコネクタ、Mini DisplayPortコネクタおよびDVIコネクタにDual Link対応ディスプレイを接続して使用する場合のみ表示可能。

注2：DisplayPortコネクタおよびMini DisplayPortコネクタを使用する場合のみ表示可能。

5.4 光学ドライブ

各数値は仕様上の最大値です。使用するディスクや状況によって異なる場合があります。

ディスク	スーパーマルチドライブ ^注	
	読込速度	書込速度
CD-ROM	24x	—
CD-R	24x	24x
CD-RW	24x	10x
DVD-ROM	8x	—
DVD-R (4.7GB)	8x	8x
DVD-R DL (8.5GB)	8x	6x
DVD-RW	8x	6x
DVD+R (4.7GB)	8x	8x
DVD+R DL (8.5GB)	8x	6x
DVD+RW (4.7GB)	8x	8x
DVD-RAM (4.7GB/9.4GB)	5x	5x

注：バッファアンダーランエラー防止機能付

CELSIUS
C780

製品ガイド（機種別編）
B6FK-1781-01 Z0-00

発行日 2019年8月
発行責任 富士通株式会社

〒105-7123 東京都港区東新橋1-5-2 汐留シティセンター

- このマニュアルの内容は、改善のため事前連絡なしに変更することがあります。
- このマニュアルに記載されたデータの使用に起因する第三者の特許権およびその他の権利の侵害については、当社はその責を負いません。
- 無断転載を禁じます。